

つなげて創る函館視力障害センターのかたち —茶の間プロジェクトが問いかけている課題—

自立支援局函館視力障害センター 館田美保 稲葉幹人 金子一夫

1 はじめに 函館視力障害センター（以下「センター」という。）は昭和 39 年の創設以来、理療教育において 1,562 名の卒業生、334 名の修了生を送り出し、北海道・東北地方における唯一の国立障害者支援施設として、視覚障害者の就労、自立支援の推進に一定の役割を担ってきた。しかし、利用希望者の減少傾向がすすむ中で、センターが今後どのような役割を担うべきなのか、新たなかたちづくりを模索すべき岐路にさしかかっている。

2 茶の間プロジェクトとは この模索の出発点として着目したのが平成 25 年度に実施した茶の間プロジェクトである。これは当初、将来の居室改修モデルの計画であったが、函館の伝統的な建築再生から地域交流まで幅広く取り組む気鋭の建築家と数ヶ月に及ぶ検討を重ねるうち、利用者相互の交流拠点としての目的を包含する「茶の間プロジェクト」へと発展していった。

このプロジェクトにおいては、人々が集える空間の創出、和風建築と生活の様式がもたらす効能の再評価、地元の建材・建築技法の活用による地域社会の伝統・風土とのつながりの演出、心身に安らぎをもたらす自然素材の活用などが盛り込まれた。

3 問いかけている課題 このように多くのアイデアが実現した一方、完成後の活用は低調で、当初構想した交流空間としての役割は全く実現できていない。つまり、茶の間プロジェクトの主眼は人々が求める集いの空間の創出であったにもかかわらず、その主役となる多様な人々との対話を通じて構想をデザインしていく視点を欠いていた。

4 新たなセンターのかたち ここで、センターが求められている新しいかたちをどのように模索していけばよいのだろうか。「茶の間プロジェクト」の経験には、その構想を進める上でのヒントがある。人と人がつながらなければ、建築物は空虚な箱にすぎない。建築物を建築物として機能させるのは、人と人がつながる空間をつくりだすデザインである。

新たなセンターのかたちを模索し、探求していくためには、多様な他者同士の「対話」などの交流を重ねていく取り組みが欠かせない。多様な他者との対話・交流によって構築される「関係性」によって、人は個性・独自性（ユニークネス）を発現させることができる。この個性こそが、新たなデザインを創出する試行錯誤の原動力となって、人と人とのつながりを生み出していくと考えている。

5 おわりに 私たちはいま、①人々が対話・交流する空間、②多様な情報集積と発信による、つながりの強化、③主体的な学びによる生きる意味と価値の発見、④伝統風土につながる地域に根ざした生活の再生、等々、従来の「支援」という枠組みを超えるような「かたち」につながるキーワードを模索しはじめた。今後さらに多様な人々との対話を重ねつつ、障害者と健常者の垣根を乗り越えるようなセンターの新たなかたちをデザインすることに取り組んでいきたい。